

学生の自己教育力はいかに育むことができるか

～他者との親密さに着目して～

1200508 藤岡 佑梨

高知工科大学 経済・マネジメント学群

1. 概要

本研究では、親、教師、友人といった「他者との親密さ」がこれからの社会で生き抜くために必要な「自己教育力」とどのように関連するかを検討した。大学生128名を対象とした調査を行った。学習動機づけ尺度の確認的因子分析を行ったところ、進路決定後の尺度が4因子で考えることができなかった。そのため、学習動機づけ以外の親密さの尺度と自己教育力の尺度でパス解析を行った。その結果、全体で定量的に見ると「教師との親密さ」が「親との親密さ」よりも「自己教育力」に及ぼす影響が大きいことが明らかになった。また、関連の様子が学生の性別、学年別によって全体の結果とは異なる可能性があり、特に学士4年生においては「教師との親密さ」が「自己存在感」に大きく影響することが明らかになった。

2. 背景

2.1 自己教育力

学校教育は、生涯学習の基盤を担う重要な役割を持つ。その中でも、初等中等教育での学校教育は児童・生徒に生涯にわたり学ぶために必要な能力・自ら学ぶ意欲・態度を育ませるための重要なものであるといえる。生涯学習の基盤を育成する中で特に留意すべきことは基礎・基本の徹底と自己教育力の育成である。[現代]教育学辞典[1]によると「自己教育力」とは「自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力」と書かれており、自己教育力の育成に関しては、昭和58年11月に中央教育審議会が出した「教育内容等小委員会審議経過報告」にて、今後の学校教育で特に重視すべきことのひとつとして書かれている。その中で、“これからの変化の激しい社会における生き方の問題にかかわるものとして、自己教育力が大切であり、それは「主体的に学ぶ意志、

態度、能力」の育成である”[2]と指摘されている。自己教育力を育むためには、学校教育において単に知識・技術伝達型の授業を行うのではなく、児童・生徒の発達段階に応じた知識・技術を確実に身につけさせることや、何をどのように学ぶかといった主体的な学習の仕方、態度を身につけさせることが重要である。

2.2 教師—生徒間の信頼関係

近年、学校教育においていじめ、不登校、学級崩壊などの様々な問題が発生している。そこで、教師の重要性が指摘され、教育現場において生徒・教師間の信頼関係はより重要なものとされている。中でも、生徒の教師に対する信頼感は、生徒の「教師関係」における適応だけではなく、「学習意欲」「進路意識」「規律への態度」「特別活動への態度」といった、その他の学校適応感の側面にも影響を及ぼすこと(中井・庄司, 2008)[3]が指摘されている。また、生徒の教師に対する信頼感のうちの「不信」に、成育歴における親子関係などの要因が関わっている可能性があることや、思春期が信頼感の再獲得の時期であることから、この時期に特定の他者である教師と、信頼関係を築くことが重要であることが示唆されている(中井・庄司, 2006)。^[4]そして、思春期の他者との関係性がアイデンティティの形成に影響を及ぼすことも指摘されている(杉村, 1998)[5]ことから、生徒と教師の信頼関係を構築することは、生徒のアイデンティティ形成の面においても重要とされている(中井・庄司, 2008)[3]。

2.3 学習へのアプローチ

中井・庄司(2008)では、教師への信頼感と学習動機づけの関連が検討されており、信頼感の高さが学習動機づけを促進することが指摘されているなど、生徒と教師の信頼関係が生徒の学習動機づけに影響を及ぼすことについては多くの研究がなされている。

また、生徒と他者の親密さが学習動機づけに及ぼす影響について、倉住・櫻井(2015) [6]では、教師との親密さが学習動機づけの内的調整に正の影響、外的調整に負の影響を有することが指摘されている。親との親密さはすべての動機づけ下位尺度に影響を及ぼしており、内的調整、同一化的調整に対して最も影響する要因であると指摘されている。また、倉住・櫻井(2015) [6]では“親および教師の親密さと親、教師、友人すべての学業への価値観の認知が学習動機づけに影響することが明らかとなった。ただし、教師や友人からの影響は見られたものの、その影響力は親ほどではなかった。中学生を対象に調査を行ったことを考えると、教師や友人といった家庭外の要因も大きく影響すると考えられたが(酒井他, 2002)、実際には親の要因が根強いことが明らかになった。” [4]とあり、学習動機づけ以外での生徒に対する学習へのアプローチ方法がより必要となる。そこで、前述したように、これからの変化の激しい社会における生き方の問題にかかわるものとして大切となり、主体的に学ぶ意志、態度、能力の育成にもかかわる「自己教育力」に対するアプローチを検討する。それにあたり、これまで学生の自己教育力と、学生と教師の関係についての研究はなされていないことを踏まえ、学生と教師の親密さや他者との親密さが自己教育力に影響を及ぼすのか検討する。

3. 目的

学生の他者との親密さと自己教育力の関連を検討する。

4. 研究方法

4.1 調査対象者

高知工科大学生を中心とした大学生(短期大学生を含む)学士1年生から修士1年生の計128名が対象であった。内訳は学士1年生33名(男性26名女性7名)、学士2年生(短期大学2年生を含む)41名(男性33名、女性8名)、学士3年生10名(男性5名、女性5名)、学士4年生42名(男性15名、女性27名)、修士1年生2名(男性1名、女性1名)であった。

4.2 調査内容

4.2.1 学習動機づけ

倉住・櫻井(2015) [6]で用いられた自己決定理論に基づき作成さ

れた速水・田畑・吉田(1996) [7]の中学生・高校生用学習動機づけ尺度を使用した。項目内容は「内的調整」、「同一化的調整」、「取り入れ調整」、「外的調整」の4つの下位尺度により構成されている。本研究ではすべての項目を使用した。進路決定前と進路決定後において、勉強や宿題をする理由について質問し、各項目にどの程度当てはまるか回答を求めた。回答方法は「1：まったく当てはまらない」、「2：ほとんど当てはまらない」、「3：どちらかといえば当てはまらない」、「4：どちらかといえば当てはまる」、「5：よく当てはまる」、「6：とてもよく当てはまる」の6件法であった。速水・田畑・吉田(1996)では5件法で用いられているが、当てはまる、当てはまらない、のどちらに近いのか、より詳しく検討するため、6件法で実施した。

4.2.2 他者との親密さ

倉住・櫻井(2015)で用いられた岡田有司(2008)による学校生活の下位領域に関する意識尺度、中井・庄司(2006)のSST尺度(生徒の教師に対する信頼感尺度)を参考に項目を作成したものを使用した。「〇〇は私の気持ちを考えてくれている」、「〇〇はきっと私の相談にのってくれる」、「〇〇とはうまくいっていると思う」、「〇〇とは気軽に話すことができる」の4項目であった。なお、〇〇の部分には、「私の親」、「先生」、「まわりの友達」のいずれかを当てはめた文章を作成し実施した。以上、全12項目となり、回答方法は「1：まったく当てはまらない」、「2：ほとんど当てはまらない」、「3：どちらかといえば当てはまらない」、「4：どちらかといえば当てはまる」、「5：よく当てはまる」、「6：とてもよく当てはまる」の6件法であった。

4.2.3 自己教育力

天満・池田・阪根(2015) [8]において作成された自己指導能力尺度を用いた。先行研究では、“教育全体をとらえた能力感としての自己教育力、生徒指導面での生き方にかかわる能力感として捉えた自己指導能力” [8]とされているが、『現代教育事典』 [1]、『教育学大辞典3』 [12]のいずれにおいても自己指導能力についての定義はなされておらず、自己指導能力は自己教育力の一部であると考えられることができるため、自己教育力として置き換え、使

用した。本尺度は、「共感的人間関係」、「自己決定」、「自己存在感」の3つの下位尺度により構成されている。本研究では「7. 自分の良いところを、もっと伸ばそうとしている」、「8. 何をしてもだめだと思う」を除いた全8項目を使用し、各項目にどの程度当てはまるか回答を求めた。回答方法は「1：まったく当てはまらない」、「2：ほとんど当てはまらない」、「3：どちらかといえば当てはまらない」、「4：どちらかといえば当てはまる」、「5：よく当てはまる」、「6：とてもよく当てはまる」の6件法であった。

4.3 調査時期

2019年12月23日から2020年1月16日までであった。

5. 結果

5.1.1 学習動機づけの尺度構成と信頼性

学習動機づけに関する項目が、想定される因子を構成するか否か検討するため、確認的因子分析を行った。進路決定前において、下位尺度ごとに α 係数を算出したところ、内的調整で $\alpha = .89$ 、同一化的で $\alpha = .89$ 、取り入的調整で $\alpha = .78$ 、外的調整で $\alpha = .83$ となった。また、進路決定後において、下位尺度ごとに α 係数を算出したところ、4尺度で考えることができなかった。そのため今回は学習動機づけを除いた、他者との親密さ、自己教育力について考える。

5.1.2 他者との親密さの尺度構成と信頼性

他者との親密さの尺度、全12項目において質問項目が対象(親、教師、友人)別に3因子を構成するのか、質問項目別に4因子を構成するのか検討するため、確認的因子分析を行った。下位尺度ごとに α 係数を算出したところ、親との親密さで $\alpha = .92$ 、教師との親密さで $\alpha = .89$ 、友人との親密さで $\alpha = .91$ となった。すべてにおいて十分高い値が得られた。信頼性はおおむね確認されたと判断できたため、以下の分析では他者との親密さの下位尺度得点を使用することとした。

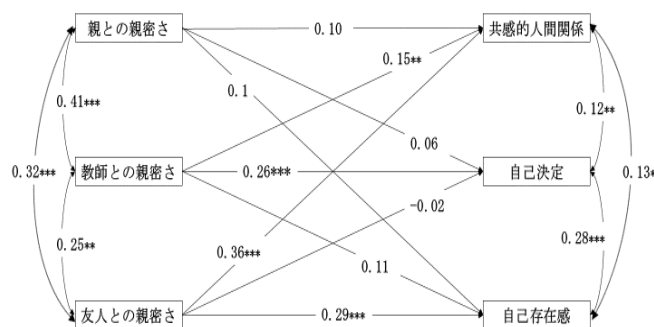
5.1.3 自己教育力の尺度構成と信頼性

自己教育力の尺度、全8項目において質問項目が想定される因子を構成するか否か検討するため、確認的因子分析を行った。下

位尺度ごとに α 係数を算出したところ、共感的人間関係で $\alpha = .83$ 、自己決定で $\alpha = .66$ 、自己存在感で $\alpha = .69$ となった。一部十分高いとは言えない数値も見られたが項目数が少ないことを踏まえると、許容できるものと考えられるため、下位尺度別に下位尺度得点を使用することとした。

5.2 他者との親密さと自己教育力の関連

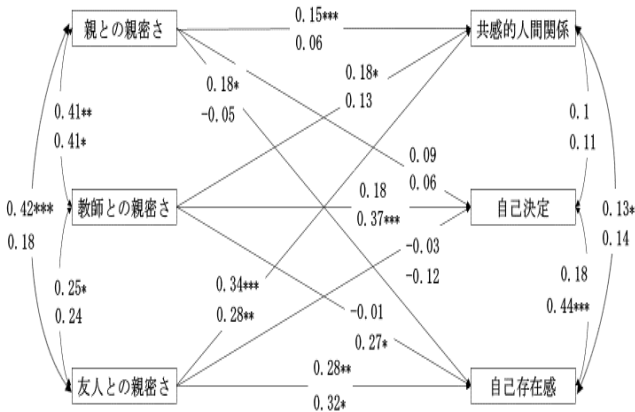
他者との親密さが自己教育力に及ぼす影響を検討するため、他者との親密さから自己教育力へのパスがすべてあること、誤差間に共分散があることを仮定して「他者との親密さ尺度」を独立変数、「自己指導能力尺度」を従属変数とするパス解析を行った。(Figure1) 適合度指標はCFI=1.000, RMSEA=0.000であり、データとモデルの適合は一定の基準を満たしていると判断した。数値はいずれもパス係数を示した。その結果「親との親密さ」についてはいずれのパスも有意ではなかった。「教師との親密さ」については「共感的人間関係」、「自己決定」へのパスが有意であった。「友人との親密さ」については「共感的人間関係」、「自己存在感」へのパスが有意であった。



* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$
Figure1 他者との親密さと自己教育力の関連

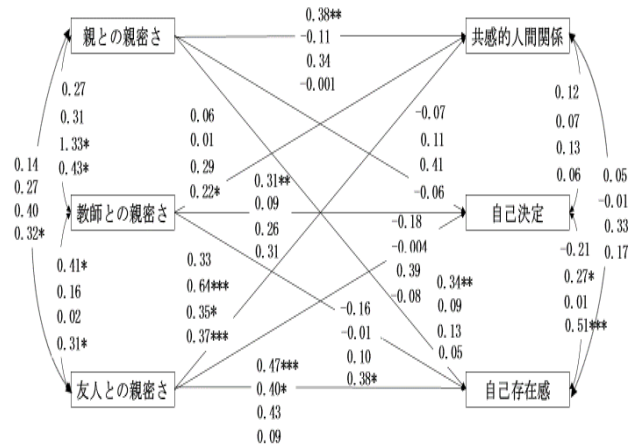
次に性別の相違の有無の検証のためパス解析を行った。(Figure2) 適合度指標はCFI=1.000, RMSEA=0.000であり、データとモデルの適合は一定の基準を満たしていると判断した。数値はいずれもパス係数を示した。その結果、「親との親密さ」については男性で「共感的人間関係」、「自己存在感」へのパスが有意であった。「教師との親密さ」については男性のみ「共感的人間関係」、女性のみ

「自己決定」、「自己存在感」へのパスが有意であった。「友人との親密さ」については男女ともに「共感的人間関係」、「自己存在感」へのパスが有意であった。



注1 上段=「男」、下段=「女」
*p<.05, **p<.01, ***p<.001
Figure2 他者との親密さと自己教育力の関連(性別)

次に学年の相違の有無の検証のためパス解析を行った。(Figure3) 修士1年生に関してはデータが不足しているため、パス解析を行わなかった。適合度指標はCFI=1.000, RMSEA=0.000であり、データとモデルの適合は一定の基準を満たしていると判断した。数値はいずれもパス係数を示した。その結果、「親との親密さ」については学士1年生のみ「共感的人間関係」、「自己存在感」へのパスが有意であった。「教師との親密さ」については、学士4年生のみ「共感的人間関係」、「自己存在感」へのパスが有意であった。また、学士1年生のみ「自己決定」へのパスが有意であった。「友人との親密さ」については、学士2年生から4年生において「共感的人間関係」へのパスが有意であった。また、学士1年生と学士2年生のみ「自己存在感」へのパスが有意であった。また、学士4年生において、「教師との親密さ」が「自己存在感」に及ぼす影響が、「親との親密さ」、「友人との親密さ」が「自己存在感」に及ぼす影響に比べて極端に高いことがわかった。



注1 上段=「学士1年」、二段=「学士2年」、三段=「学士3年」、下段=「学士4年」
*p<.05, **p<.01, ***p<.001
Figure3 他者との親密さと自己教育力の関連(学年)

5.3 考察

本研究の目的は、学生の他者との親密さと自己教育力の関連を検討することであった。仮説は「教師との親密さ」は「親との親密さ」よりも生徒の自己教育力へのアプローチになり得るであったが仮説は棄却されなかった。

第1に、学生の他者との親密さが自己教育力へ及ぼす影響を性別に検討するため、パス解析を行った。その結果「親との親密さ」については、男性のみ「共感的人間関係」、「自己存在感」に正の影響を及ぼしていた。「共感的人間関係」は「友人が発表しているときは、話をよく聞いている」といった友人との良好な関係にかかわる内容であるが、これらの事柄に、親がいつも子供の話をどのように聞いているかなどの習慣が関わることが考えられる。性差が出たことに関しては男性のほうが女性より、人間関係としてより親しい親から「共感的人間関係」の影響を受けやすいといった可能性が考えられる。「自己存在感」への影響については後述する。

「教師との親密さ」については、男性のみ「共感的人間関係」に正の影響、女性のみ「自己決定」、「自己存在感」に正の影響を及ぼしていた。特に、「教師との親密さ」が「自己存在感」に及ぼす影響は男女差が大きく出ている。この中で、女性については

「教師との親密さ」と「友人との親密さ」が「自己存在感」に及ぼす影響の大きさがほとんど変わらないのに対し、男性については「親との親密さ」、「友人との親密さ」に比べ、「教師との親密さ」が「自己存在感」に及ぼす影響が大きく低いことがわかる。これについては松尾・吉川・森岡(2015)において、“男性では狩猟採集民としての男性社会での競争、権力、社会的地位などの性意識や環境要因が強く、他者との共存、あるいは他者、特に女性を理解することに困難を経験するといわれている(Schiffer B, 2013)”とあり、社会的立場認知の男女差によって、「教師との親密さ」、「親との親密さ」、「友人との親密さ」が「自己存在感」に及ぼす影響の性差に関わった可能性が考えられる。

「友人との親密さ」については男女ともに「共感的人間関係」、「自己存在感」に正の影響を及ぼしていた。このことについては前述したように質問項目に、友人と親密になる過程で通過する事柄が含まれていることや、学内で行動を共にするのが友人であることが多いということが理由になると考えられる。

第2に学生の他者との親密さが自己教育力に及ぼす影響を学年別に検討するためパス解析を行った。その結果、「親との親密さ」については、学士1年生でのみ「共感的人間関係」と「自己存在感」に正の影響を及ぼしていた。他学年に比べ、パス係数が高い数値を示していることから学年が上がるにつれて親との親密度が低下していく可能性が示された。

「教師との親密さ」については、学士4年生でのみ「共感的人間関係」、「自己存在感」に正の影響を及ぼしていた。特に、「自己存在感」について「友人との親密さ」からの影響が大きく他に比べて小さいことを踏まえると、ゼミ配属による担当教諭との関係の深まりや、卒業論文執筆期間である調査時期等が影響していると考えられる。また、学士1年生でのみ「自己決定」に正の影響を及ぼしていた。このことに関しては、授業選択の際、興味のある分野を絞り込みにくい場合、〇〇先生の授業だから受けたいなどの理由が挙げやすいことから、このような結果になった可能性が考えられる。

「友人との親密さ」については、学士2年生から4年生につい

て、「共感的人間関係」に正の影響を及ぼしていた。これについては質問項目に「友達の良さを認めて、協力して物事に取り組んでいる」などの友人と親密になるにあたり通過する過程の事柄が含まれていることが影響していると考えられる。また、学士1年生、2年生においては「自己存在感」に影響を及ぼしていた。これについては、在学中の研究配属前は、特に友人と行動することが多く、そのことが自己存在感に大きく影響することが考えられる。

以上のことから、定量的にみると自己教育力は学生と親の親密さよりも、教師との親密さのほうが影響を及ぼしやすいことがわかった。自己教育力とは“自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力”であり、学習動機づけよりも、学生の生涯を通しての学びに、より関係するものであると考える。教師として、学生の将来を考えた指導を継続的に行うことが生徒の学びには必要なことであり、また、そのことを生徒に認識させることが最も大切であると考えられる。これから教師になるにあたって、本研究での結果はとても価値のあるものであった。

6. 今後の課題

6.1 学習動機付け尺度について

今回使用した速水・田畑・吉田(1996)の中学生・高校生動機づけ尺度において、進路決定後の学習動機づけの結果が4尺度で考えることが出来なかった。尺度作成の研究では本尺度を5件法で測定していたが、本研究では6尺度に変更して用いた。倉住・櫻井(2015)においては本尺度の各下位尺度からそれぞれ4項目を抜粋し使用している。回答方法は6件法となっているが、概念と一致した4因子構造が妥当であると判断されている。そのため、本研究において6件法に変更したことが原因ではないと考えられる。他の可能性として、本研究のデータ数は128であることに比べて、倉住・櫻井(2015)のデータ数は370と本研究の2倍以上あることから、データ不足が原因となったことが挙げられる。

6.2 居住状況の調査について

他者との親密さ以外の独立変数、または従属変数として、生徒が親と同居しているか、を追加することにより、特に親との親密

さが同居、別居、自己存在感に影響するのかを検討できると考えられる。

6.3 性差について

本研究において、質問調査を行ったほとんどのデータが高知工科大生であることから、特に教師との親密さのデータが教諭・生徒を含めた大学自体の男女比また、男女間関係により影響が及ぼされた可能性が考えられる。教諭と生徒の信頼関係と自己教育力の関連を性差により検討することにより、学校内の教諭と生徒のマッチングなどに活用可能だと考えられる。

また、高知工科大学などの男女比が異なる大学ごとで自己存在感などのデータを取ることで、全体の男女比による自己存在感に影響がないか検討することにより、自己教育力における性差がより検討できると考えられる。

6.4 学年・性差との関連付けた結果

6.1にも挙げたデータ不足の課題により、本研究では検討することができないが、学年と性差を関連付けたパス解析を行うことができれば、より詳細に他者との親密さがどのように学生に関連するのかを検討できると考える。

6.5 中学生との比較について

本研究では調査対象が大学生であったため、これから関わる中学生に本研究の結果が適応可能かについては疑問が残る。小学校・中学校・高等学校・大学ごとにそれぞれ調査や比較研究を行うことで、より学年・性差について詳細に検討できると考える。

6.6 継続的研究の必要性

本研究において学年別で検討を行った項目があるが、同一人物に定期的に今回の調査を行うことにより、自己教育力が育まれる過程をより詳細にみることができる。

謝辞

本論文を作成するにあたり、ご指導を頂いた指導教員の中村直人教授に心より感謝いたします。矢内勇生先生、日道俊之先生には解析パッケージの使用法等多くの助言を賜りました。感謝いたします。高知工科大学をはじめとする学生の皆さんから多くのデータを提供していただきました。厚く御礼を申し上げ、感謝する

次第です。

引用文献

- [1] 『[現代]教育学事典』青木一・大槻健・小川利夫・柿沼肇・斎藤浩志・鈴木秀一・山住正己編 労働旬報社出版
- [2] 文部科学省「我が国の文教施策」(昭和63年度)[第一部 第2章 第1節 2]
- 2020年2月12日アクセス
https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad198801/hpad198801_2_018.html
- [3] 「中学生の教師に対する信頼感と学校適応感との関連」中井大介・庄司一子
- [4] 「中学生の教師に対する信頼感とその規定要因」中井大介・庄司一子
- [5] 「青年期におけるアイデンティティの形成：関係性の観点からのとらえ直し」杉村和美
- [6] 「中学生における「他者との親密さ」ならびに「他者が有する学業への価値観の認知」が学習動機づけに及ぼす影響：親・教師・友人に注目して」倉住友恵・櫻井茂男
- [7] 「総合人間科の実践による学習動機づけの変化」速水敏彦・田畑治・吉田俊和
- [8] 「生徒指導実践に活かす自己指導能力尺度の作成」天満洋介・池田誠喜・阪根健二
- [9] 「他者の感情理解に自己の表情が影響する～共感的コミュニケーションの性差の観点から～」松尾篤・吉川歩実・森岡周
- [10] 「青年期女子の自己教育力を規定する要因の検討 ―居場所意識との関連性から―」芝崎美和・柴崎良典
- [11] 「教員との関係性認知が自己教育力に及ぼす影響」飯島博之・守谷賢二・吉森丹衣子・小野淳・斎藤富由紀
- [12] 『教育学大辞典3』編集代表 細谷俊夫・奥田真丈・河野重男 第一法規出版
- [13] 「青年期後期の子の親との関係——精神的自立と親密性からみた父子・父娘・母子・母娘間差——」水本深喜
- [14] 「大学生の自己教育力に関する発達の研究——回想的質問

紙法による分析——」 森敏昭・清水益治・石田潤